



さとのかぜ NO. 147

千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

8月号 2007年8月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>

人と川との関わりへの回復



<『小川の生き物ウォッチング』より>

◇環境の変化に適応して生きる淡水魚たちの知恵

「雨が降り始めました。川では水かさが増えています。雨の量が増えると水温が下がりはじめます。上流から茶色い濁水が流れてきます。しばらくすると川にすんでいる魚は川底へ移動し始めます。小さな石を含んで、流れのゆるやかな川岸に寄り、上流へ上流へ少しずつ移動し始めます。雨が降る、水かさが増す、水温が下がる、濁り水に出会う、これらの条件がそろると魚の生活のしかたが書かれた設計図が取り出され、設計図どおりの行動をすることになります。…中略…増水時に上流から運ばれてきた新しい砂のベッドに、それぞれの魚が決まった方法で卵を産んでいきます。石のまわりにバラバラとまき散らしていくものもあれば、…中略…二枚貝の中に産みつけるもの、その形式はいろいろですが、産みつけられた卵が孵化して稚魚になったとき、そこに餌があるか卵や孵化した稚魚が呼吸する酸素が十分あるかどうかを親は見極めた上で産みます。」以下略。

<引用文献 「川のHの条件」 森下郁子他著 山海堂>



7月のセンター行事

- ・『ハスの観賞会（第1回）』（8日）
- ・『ハスの観賞会（第2回）』（15日）
- ・『小川の生き物ウォッチング』（29日）



《『ハスの観賞会』》

◇相変わらず多いハスの愛好者！

昭和26年に大賀一郎博士が約2千年前のものと推定されたハスの種子を千葉市検見川で発見し、発芽・開花に成功したことが報道されてから、ハスの花への関心が高まり、かつての栄光に浴するようになりました。以来、大賀ハスは、千葉県のおがの天然記念物の指定を受け、県内をはじめ全国に広がっていきました。その後、平成4年には、「千葉市の花」に選ばれ、今日に至っております。



さて、昭和35年に、天皇陛下（当時皇太子）が訪米した折りに、アメリカ産のキバナバスが再び導入され、育成・開花に成功し、皇太子殿下に因み「王子蓮」と命名されました。東洋産のハスは、紅白系統ですが、これに黄色系統の花ハスが導入されて品種もより多様になってきました。その後、「大賀蓮」と「王子蓮」の交配がなされ、昭和41年に、薄黄色で、花弁の縁が淡い紅色の「舞妃蓮」まいひが開花しました。ここに、東洋産のハスとアメリカ産のハスの交配による新たな品種が誕生したのでした。今もハスの愛好家は多く、2時間以上もかけて車で訪ねてくれる方々がございます。当センターのハス田には、これまで、大賀ハスを中心に20種余りの品種のハスが毎年美しい花を咲かせておりました。しかし、残念なことに、今年は、ハスの生育状況が良くなく、期待に応えられなくて残念に思っております。来年は丹精を凝らせて、再び美しい花を咲かせたいと思います。（渡邊美利）

《『小川の生き物ウォッチング』》

◇夷隅川には、なんと72種もの魚類が生息！

河川に生息する動物には、底生動物群集や魚類群集、その他、両生類、は虫類などがあります。底生動物には、プラナリア、ウズムシなどの扁形動物、イトミミズ、ヒルなどの環形動物、カワニナ、タニシ、シジミなどの軟体動物、甲殻類、昆虫類などの節足動物があります。

中でも昆虫類の幼虫を主体とする水生昆虫類は付着藻類の生物量をコントロールし、魚類へ生産物を流す役割



をしています。当センターの近隣を流れる夷隅川は、流路延長が67.5km、流域面積は千葉県内最大の約300 km² です。この川に生息する魚類は、平成6年度建設省「河川水辺の国

勢調査」によると72種で、生活型では、汽水・海水魚が多く、次に純淡水魚、回遊魚の順となっています。その中には、ギバチやジュズカケハゼ、ホトケドジョウ、シマドジョウなどの、保護上重要な魚類も含まれています。夷隅川の支流には、全国的に珍しく、国の天然記念物に指定されているミヤコタナゴが自然繁殖している小川があり、周辺農家の方々のご協力により保護活動をしております。しかし、これらの方々のご苦勞を尻目に、相変わらず密漁者が跡を絶たないのは残念なことです。今、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ種に選定されているメダカとタナゴ類は、ともに谷津田を代表する魚類で後世に引き継いでいかなければならない生き物です。

◇新田川で見付けた多様な生き物たちは？

新田川は、いすみ市新田地区の水田の中心部を流れる小河川で、上流部に堰（ため池）があり、流量の変化はあっても、1年中水がゆるやかに流れています。流路は、直線的ですが、河床には礫や砂があり、更に上流から流されてくる土砂も適度にあり、瀬や淵もできていて、魚類等が住み分ける環境も整っています。一昔前であれば学校が休みともなると子供たちが川に入って遊ぶ姿が見



られたと思われませんが、今では、こんなイベントでもないとなかなか川に入ることは困難となっています。観察の当日は、この地区の土地改良区の役員の方に許可をお願いするとともに、上流に設置されている羽目板を外すことがないように等をお願いをしました。

当日は、台風4号の通過後、流量も減って川遊びには良い環境となっていました。参加者は家族連れで、初めての人がほとんどで、遠くからの参加でした。土地改良区の方が見守ってくれている中、川岸で身支度をしてから、慎重に川に下り立ちました。全員にタモ網とバケツを配布して、川の歩き方や魚等の捕まえ方などを話してから捕獲活動に入りました。最初は、慎重に探す様子が見られましたが、誰かが見付けて捕まえると、どんどん川の流れの中に入り、網を使って追いかけはじめました。一時捕獲活動をしてから、「追い網」や「地獄網」を使っての捕獲を行い、水面から見ていると見えなかった水中に沢山の種類の魚たちがいることに驚いていました。観察できた主な生き物は次のとおりです。

コイ科では、タイリクバラタナゴ、ウグイ、タモロコ、モツゴなど、ドジョウ科では、ドジョウ、シマドジョウ、ギギ科では、ギバチ、ハゼ科では、ヨシノボリ、エビ・カニの仲間では、テナガエビ、シマエビ、モクズガニ、ザリガニ、貝の仲間では、イシガイ、カワナ、マルタニシ、イシマキガイなど、昆虫の仲間では、アメンボ、シマアメンボ、コオイムシ、ハグロトンボなどでした。子供たちは、水浸しになりながらも楽しそうに活動し、珍しい生き物に素直に感動しておりました。これからの川づくりは、より地域の人々に親しまれ、より自然で、共生できるものになることが期待されます。 （渡邊美利）

和泉-日在浦だより アカウミガメを見送る (8/1)



[砂の輻射熱で温度調節するシロチドリ]

7月4日、わが家から歩いて3分の海岸でシロチドリの産卵巣を発見し、7月22日に空き巣になるまでの間毎日、朝晩観察しました。台風4号では巣の50cm近くまで冠水しましたが、親鳥が抱卵を放棄しない姿を見届けられたのは嬉しいことでした。

数日好天が続いた折には、親鳥は抱卵せずに巣を離れ、羽で卵に砂をかけ卵の温度調節をしているのが確認できました。近くの砂

砂に埋められたシロチドリの卵(7/6)は手で触れると熱く感じました。オーストラリアのツカ

ツクリが土に卵を埋め、発酵熱で卵を孵化させることを思い出しました。犬を連れて散歩する人やサーファーが多いことから、保護のため15m四方にロープを張り囲いをしておいたので、最後まで観察できました。

[産卵終わったアカウミガメを見送る]

今年6番目の上陸は、7月29日早朝夷隅川河口左岸であり、第1発見者の渡辺隆夫さんから連絡を受け、産卵を終えたアカウミガメが海へ帰るのを見届けることができました。産卵を終えた親ガメは、大仕事を終えて疲れきり、匍匐の速度はとても緩慢でした。甲羅に砂をたくさんかぶったまま海に帰る姿に立ち会えた者はみな感動しました。

筆者は、匍匐中に巻尺で実測し、全長113cmの大型であることを確認できました。高さ1.1mの浜崖を乗り越え、渚線から55m離れた砂浜の奥に産卵したのは天晴れです。



産卵後帰る親ガメ(7/29)



親ガメを見送る(夷隅川河口左岸 7/29)
りたいと思います。

[野生生物の知恵に感心]

産卵位置の確認は夕刻に、市職員によって行われましたが、産卵巣は卵の頂部が深さ42cmととても深いものでした。産卵後砂浜の奥の方から産卵巣に砂をかけた跡があり、ボディープットと思われる窪みの2m位手前に卵を産んでいたことが分かり、野生生物の知恵に改めて感心しました。4号台風で漂着した木片や竹を集積した間をぬって無事産卵を終え、太平洋へ戻っていったこの大型の親ガメに拍手を送りたいと思います。

[森谷 洵(もりや ふかし)]

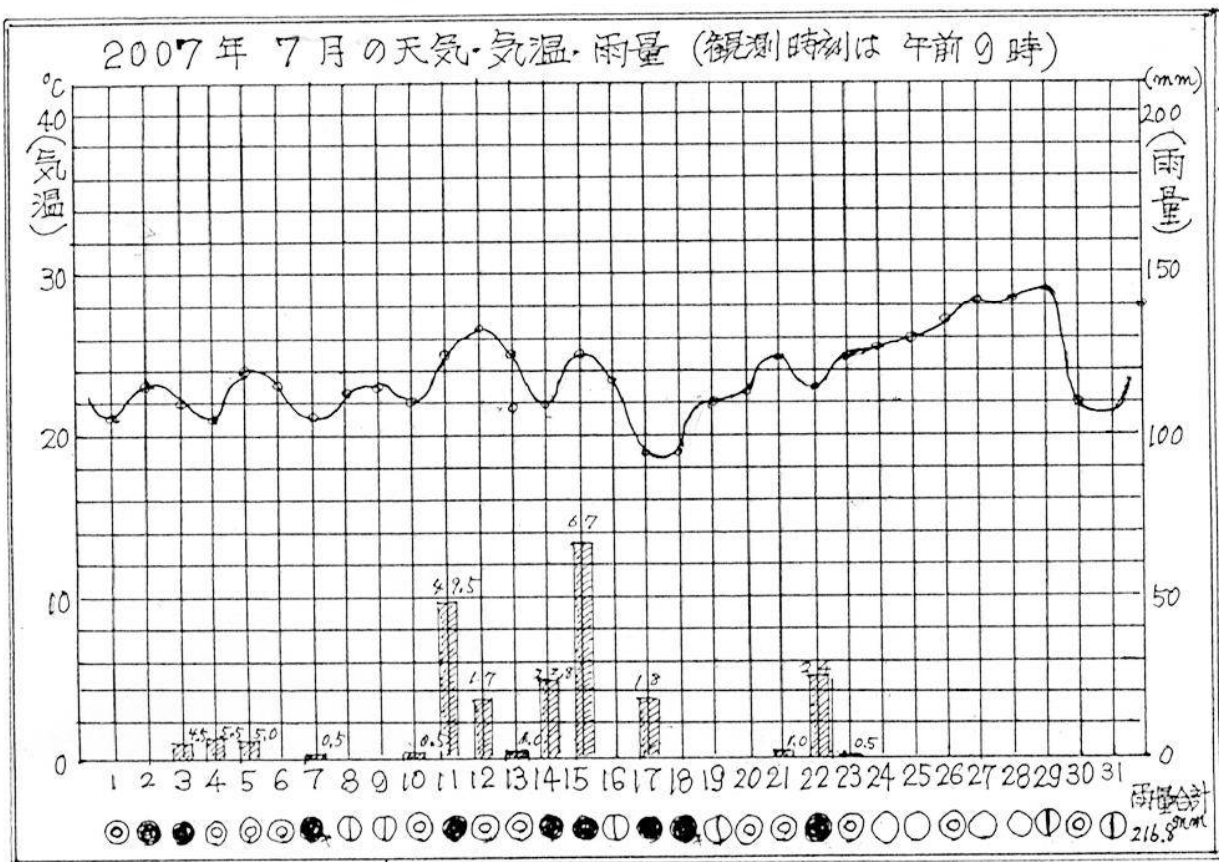
◎今、いすみでは???

8月2日の朝日新聞の朝刊に『よく降った7月でした』という記事を見ました。そこで、ここ、いすみではどうかと思ひ、当センター（千葉県いすみ環境と文化のさとセンター）で観測したデータを見直してみました。先ず、今年の5月の降水量は『119 mm』、今年の6月が『110 mm』、7月が『217 mm』と、7月は5月、6月に比べると約2倍近く降っているし、一昨年、昨年の7月が『145 mm』、昨年の7月が『176 mm』でしたから、今年の7月は、一昨年、昨年の7月と比べても、2倍までいかななくても、『かなりよく降った7月の雨量だった』、ということが、このいすみ地方でも言えることが、わかりました。

センターのある夷隅地方には、貯水池が多くあって、これらの水が灌漑用水（かんがいようすい）として、稲作に大変重要な働きをしています。稲作のため8月の中旬までのあとわずかですが、十分貯水しておくため、7月の雨は大変役に立ったものと思います。

さて、今回はセンター地区でなく、いすみ市内の一部岬地区内の野草や昆虫を見て歩きました。水田の周囲や道端はよく草が刈られていましたが、残っている所では、センター地区と同じ種類の野草が花をつけていました。セイヨウタンポポ、ハルノノゲシ、ヒメジョオン、キツネノボタン、コマツナギ、アキカラマツ、イヌタデ、等々が見られました。昆虫は、航空防除のためか数が少なく、トノサマバッタ、シジミチョウ等々でした。

(芝崎昌彦)



(○: 快晴(4日), ⊕: 晴(6日), ⊙: くもり(12日), ⊛: 雨(9日))

